

フランスの家庭料理を 召しあがれ

伴野 愛

聞き手：佐多保彦 株式会社東機貿 代表取締役社長

佐多： 伴野さんは由緒あるパリの料理学校ル・コルドン・ブルーの同窓会東京支部の会長でいらっしゃいますね。同窓会というのはどのような組織ですか。

伴野：ル・コルドン・ブルーは現在パリ、ロンドン、東京校があります。それらの卒業生で日本に在住の方々の同窓会です。現在会員数は約650名で、年に4回ほど、「食に関する文化活動」というテーマで、エッセイストの玉村豊男さんに「フランス料理に学ぶこと」というお話をいただいたり、銀座の老舗レストラン、マキシムの大西シェフによるワイン講座を開いたりしています。

同窓会には料理研究家の江上トミさんやシャンソン歌手の石井好子さんなど、多数の著名人がおられます。同窓会名誉会長をやっている石井さんは、『巴里の空の下オムレツのにおいは流れる』（*1）というエッセイで初めてル・コルドン・ブルーを日本に紹介されました。これは、戦後まもないころパリで、日本食が恋しくて日本人どうしてお寿司パーティーを開いたり、手作りのカレーライスで仲間にとっても喜んでもらったことなど、食の楽しみやおもてなしの心が生き生きと描かれているエッセイです。

佐多：ル・コルドン・ブルーは100年以上の歴史を持つとうかがっていますが。

伴野：ええ。この学校は1895年にパリのフォブール・サントノレに設立されました。それまで貴族に仕える料理人は男性でしたが、女性のお手伝いさん（ボンヌ）にも家庭料理を教える学校を作ろうということでル・コルドン・ブルーが開設されました。ボンヌのための学校から徐々にいわゆる料理学校と呼ばれるものになりましたが、今でも家庭料理という伝統は続いているわけなんです。

私が通った1972〜74年ごろはマダム・ブラサーールという女性の経営で、生徒数も少なく小規模な学校でした。1984年に、あのリキュールのコワントロー氏の経営になり徐々に大きくなりまして、現在パリ校には世界中から200名ほどの生徒さんが集まっています。特に最近は韓国の方が増えているようですね。パリ校には男性も比較的多くいます。日本人は一番のお得意さまで全体の4分の1を



伴野 愛 / ばんの・あい

NHKのパリ支局員、ブリュッセル、ボン支局長を歴任されたご主人に伴って8年の海外生活を体験。それぞれの国で料理を学び、パリでは世界的に有名な料理学校ル・コルドン・ブルーを卒業。1991年東京校が設立されると同時に同窓会会長に就任し、現在活躍中。

占めていますが、そのほとんどが女性です。パリの校舎は、フォブール・サントノレが後にファッションの中心になってきたために、現在は15区に移転しています。一説には料理の匂いがファッションの街には合わないということだったようです。

佐多：料理自体はいい匂いですがにね。注目の授業料はいかがですか。

伴野：パリでは25年前、料理とお菓子を合わせて学ぶと100万円くらいだったでしょうか。現在は、東京校で基礎から上級まで受けると、料理コースで約250万円、お菓子コースで約150万円ほどです。私のときは1日3品、週5日というハードスケジュールの中で、フランス料理の基礎をみっちり勉強させていただきました。創立当初からの伝統である、古典的でオーソドックスなフランスの家庭料理ですね。

入学したときにフランス人の友達がたくさんできるかなと思ったのですが、フランスにはそんなに高いお金を払ってお稽古をして物事を身につけるという考えがないようですね。それは今でも同じです。フランス人は丁稚奉公的にプロの道に入るか、そうでない人はお母さんから習うんです。日本の社会では、お茶でもお花でもお稽古ごとが日本文化を支えているような部分がありますが、フランス社会では、人からものを教わるとか、お稽古ごとをするという思想があまりないのかもしれないかもしれませんね。自分の個性とぶつかるというのかしら。フランス人の友人でフランス料理を教えている人がいたんですが、日本人に教えるのはいいけれどフランス人に教えるのは嫌だと言うんです。なぜなら、何かひとつ作り方を教えようとする、私のおばあさんはこうやった、お母さんはこうだったと、もううるさくお稽古にならないと言うんです。

佐多：それはおもしろいですね。フランス人は個性が強いから人からものを素直に習おうとしないのでしょうか。また、フランスでは大学に行く女性の数も少ないわけですから、料理学校に行く



ル・コルドン・ブルー東京校シンボルの旗

ことは、非常に贅沢なこととみなされるのかもしれませんが。
ところで、東京校のオープンは1991年ということですね。

伴野：そうです。日本に受け入れられるためにいろいろ苦労はあったようですが、私から見てもこの2年くらい、いい意味で独創性が出てきたと思います。日本にフランス料理学校はたくさんありますが、フランスの直接経営はル・コルドン・ブルーだけですし、また「一人一品作り上げる個別実習」というのも特徴のひとつです。それから先生の80%がフランス人ですから、フランスの文化も一緒に皆さんにお教えできるというのもこの学校のいいところですね。随時、学校説明会も行っておりますし、見学はお電話をいただければいつでも大歓迎です（*2）。

佐多：御校を卒業後プロの料理人になられる方はいらっしゃるんですか。たとえばお店を出すとか。

伴野：ええ、それはいらっしゃいます。ただ、あくまで古典的な家庭料理の教授が基本ですから、経営学のほうは学べないわけで、その後ホテル学校に入ったり、修業をしたりしなければなりません。同窓生の中には、お料理の先生になったり、何かサロンのようなものをやっている方もあります。

佐多：単なる趣味という枠を越えて真剣に取り組んでいらっしゃるんですね。伴野さんご自身はフランス料理のどこに最大の魅力をお感じになりますか。

伴野：フランス料理の魅力というのは、伝統的なベースがしっかりあって、そのうえで絶えず変化していることです。流行があって、その変化のおもしろさを私はとても感じるんですね。日本料理は伝統を重んじるので、流行ということが少ない気がします。フランス料理では、これまでこういうものがはやってた、今度はこういうものがはやる、といった具合なんです。私がパリにおりましたころは、フォアグラはテリーヌにさせていただきただけだったんですが、今はフレッシュなフォアグラをソテーにしてサラダと一



緒にいただいたりします。あることが流行になってくると、パートと広がるんです。たとえばヌーベル・キュイジーヌが出てきて、それが終わったらまたもとに戻るのではなくて、そこから新しいフランス料理のスタイルが現れるんです。そんな変化の醍醐味を皆さんにお伝えできるよう私たちも日々研究しているわけなんですけれども。

フランスのホテル・クリヨンのオーナーがみえたとき、有名な日本料理屋のシェフは何歳ぐらいかとお聞きになるので、一流料亭の料理長は80歳を越えていらっしゃる方も多いとお答えすると、そんなに年をとってはお料理ができるはずがないと言われるんです。フランスでは本当に有名なシェフは40代。最近ロビュションさんは50代になられてご自分の店を閉鎖してしまいました（*3）。どんどん変わっていくフランス料理ですから、若い人でないとというわけなんです。

佐多：日本は最近またすごいグルメブームですが、この現象はどうごろんになりますか。

伴野：日本でヨーロッパ料理というと、イタリアンのほうが皆さん親しみやすいようですね。日本人のイメージは、フランス料理というとレストランであらたまって、という感じで、家庭料理というものがあることが知られていないような気がいたします。フランス人と付き合っていると、どこどこのお家のブッフ・ブルギニオンがおいしかった、だれだれさんのほこうして作った、という話になるんです。いわゆるビーフシチューのことですが、ああいうものはなかなかレストランでは出ないお料理で、もっと気楽にフランスの家庭料理を楽しめるように、レストランのメニューに加えてもらえればいいなあと思うんです。もっと家庭的なフランス料理が日本に根づくといいと思います。

*1 暮らしの手帖社刊。初版1963年、その年の日本エッセイストクラブ賞受賞。

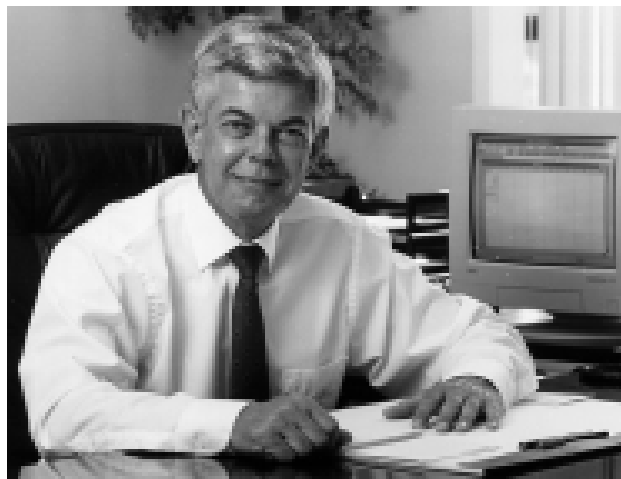
*2 ル・コルドン・ブルー東京校：〒150東京都渋谷区猿樂町28-3 ROOB-1

TEL: 03-5489-0141 FAX: 03-5489-0145 フリーダイヤル 0120-45-4840

*3 ジョエル・ロビュション：1981年伝統を誇るレストラン“ジャマン”のオーナーシェフとなり、開店後約1年でミシュランの1ツ星、2年で2ツ星、3年で3ツ星を取るという偉業を達成、天オシェフと謳われる。94年にレストラン“ジョエル・ロビュション”をオープンしたが96年には引退。その後は世界のTV、雑誌を舞台にアドバイザーとして活躍を続けている。

いかにして放射線被曝から患者 を守っていくか ——米国最新事情—— マクマホン・メディカル社の挑戦

マーティン・マクマホン



Martin Mc Mahon / マーティン・マクマホン
マクマホン・メディカル社社長（カリフォルニア州サンディエゴ）

技術革新について書かれたある本（*1）の中に次のような言葉が見られる。禅の教えを伝えるこの言葉は、マクマホン・メディカル社とその創設者マーティン・マクマホンの足跡をよく物語っている。

山これ山あり
山これ山というにあらず
山これ山というなり（*2）

1982年にマーティン・マクマホンがマクマホン・メディカル社を設立したとき、彼の前に一つの山があった。それは、放射線を扱う医師や技師の安全性を高める特別な装置の開発、という山だった。やがてその山は消え、マクマホン社は、放射線手技中の安全を確保するには新たな方策が必要であるとして、医師たちの意識におけるギャップを埋めるための本格的なマーケティング活動を開始した。その結果、彼の前にはまた山が現れ、その確固たる目標に向かってマクマホンの挑戦が始まった。こうして開発されたマクマホン社初期の製品ラインは、今日放射線治療現場の「標準設備」として世界中で使用されている。

未開拓分野を切り開くのは、技術開発の先駆者に課せられた使命である。マーティン・マクマホンはその先駆者の一人として、次に登るべき山 —— 新たな革新 —— を探し求めた。技術革新が必要な次の分野は、放射線治療中の患者の安全だった。放射線照射中の患者の皮膚の被曝線量を、リアルタイムで正確に測定・監視する装置はそれまで存在しなかった。そこで英国人物理学者キース・スパンズィックをチームに加え、マクマホン社は今日スキン・ドース・モニター（SDM）として知られる装置の研究開発に着手した。

患者の安全を確保する技術が必要だというマクマホンの直感はずばり的中した。SDMの開発がスタートした直後、様々な規制団体が放射線照射中の患者の安全という問題を認識しはじめ、それぞれに対策を打ち出したのである。まず初めに、透視による侵襲

的手技が患者に与える危険について警鐘を鳴らす目的で、公衆衛生報告が出された。その1年後には、皮膚への照射が100ラドを越える場合、被曝した箇所と推定積算被曝線量を、患者のカルテに記録するよう求める通達各施設に出された。1995年には、RSNA（*3）において評価用のSDMが紹介された。これが大きな反響を呼び、その意義が大きくクローズアップされた。ここに史上初めて、推定ではなく、正確に皮膚の積算被曝線量を測定することが可能になったのである。そのときマクマホンの目の前には、また新たな山があった。

世界中の主要施設がSDMの構想に同意を示し、マクマホン・メディカルの臨床研究プログラムに参加した。ノッティンガム大学（英国）からは、マクマホン開発チームにとって非常に貴重なデータとなる情報とテスト結果が寄せられた。同大学が妊娠中の女性の被曝線量に関するリサーチを独自に行ったことによって、SDMの適用範囲が広がったばかりではなく、このテクノロジーの必要性、有用性が証明されたのである。

また、テキサス大学（ヒューストン）のワグナー医師のチームによるリサーチは、SDMの臨床での有用性と、SDMモニタリングによって照射量を減少できることを証明した。ワグナー医師は将来、小児科におけるSDMの応用を研究したい意向で、一方、放射線が細胞の成熟分裂と遺伝子変異に与える影響を探索することによって、放射線照射と脳が受けるダメージとの関係をも明らかにしたいと考えている。

種々の心臓IVR（*4）における皮膚の被曝線量を測定することによってSDMがリアルタイムの測定装置として実用可能であるか否かを判定するために、主要医療機関と提携しているあるクリニックが、診断・治療目的で心臓IVRを受けた患者を対象に正式な臨床研究を行った。この研究で実用性は見事に証明され、その結果がまもなく医学雑誌に発表される予定である。医師はSDMによってIVR中に被曝線量を測定・モニタリングし、角度や刺入部を変える



スキン・ドース・モニター（SDM）

必要があるかどうかを迅速に判断することができるようになった。この研究ではさらに、どこにセンサーを置くべきかという問いに対する答えも明らかになった。すなわち、診断時は左肩胛骨に、治療時は治療箇所^{しやう}にセンサーを置くのが最適であるというものだった。

上記に加え他の研究機関からのデータがはずみとなって、山頂への道が切りひらかれ、SDMテクノロジーの価値はさらに高められた。今やSDMは、研究目的のみならず、ミシガン大学医療センター、大学医療センター（ドイツ、ミュンヘン）、大学病院（英国、ロンドン）、スタンフォード大学医療センターなど世界の主要医療機関の特別治療室で日常的に使用されている。

SDMテクノロジーが医療の分野で広く応用されるようになるにつれ、これが医療の本質までも変えてしまう可能性も出てきた。医師たちは、増加の一途をたどる医療の諸問題を解決するために、効果的で、より侵襲性の低い手技を探し求めている。IVRは、伝統的な開腹・開胸手術手技と比較し、はるかに費用効果が高いことが認められている。したがって、今後も長時間のIVR手技が数多く開発されるだろう。皮膚被曝線量のモニタリングによって、医師は線量を決定するために必要な情報を得、必要に応じて角度や刺入部位を変えることができる。また、SDMによって、照射が不十分だったケースでも、患者が退院する前に適切な対応処置を取ることができるのである。

SDMはまた別の意味で、医療の将来に大きな影響を与えようとしている。それは、SDMが、直接的で使いやすいトレーニング装置だからである。SDMを使用することによって、放射線手技のインストラクターは、訓練を受ける者が安全な環境で自由に実習できるように、トレーニング中の皮膚被曝線量をモニタリングすることができる。また、経験を積んだ放射線技師にとっても、SDMモニタリングは様々な可能性をもたらしてくれる。新しい手技や、照射線量レベルを下げた場合の結果などを、容易に評価できるのも

その一つである。事実、臨床の現場にいる研究者たちは、患者モニタリングにSDMを使用しはじめてから、従来の線量を20-25%減らすことができた^{くふう}と報告している。

ところで、マクマホン社の未来には何が待ちかまえているのだろうか。SDMは一つの技術として完成の域に達している。今後は細かい部分での改良が期待されるのみである。SDMのユーザー層は広がりを見せ、その技術はより巾広い分野で応用されはじめている。放射線手技における「標準設備」として認識されるというマクマホン社のゴールは、もう目前に迫っている。

SDMの次の目標がはっきり見えてきた現在、マクマホン社は、SDM患者センサー、エア・カーマ・センサー付きシステム、X線チューブを合体した新しい測定システムに照準を定めている。

医療の分野では、高度な技術へのニーズが次々と現れる。それに応えることが企業の使命と考えるマクマホン社は、過去の数々の成功に決して安住しようとはしない。その開発チームは、技術面、価格面において向上をもたらし新技術を自社製品に次々と取り入れ、ユーザーにそれを伝えるべく努力を続けているのである。

（取材・文：TKB International, Liz Sanborn）

参考文献『INNERVISION』'97.8.12号、(インターベンショナルラジオロジー (IVR)の際の患者の被曝線量のリアルタイム測定に関する提案)
草間朋子, 東京大学医学部放射線健康管理学教室

*1 Crossing the Chasm ,Geoffrey A. Moore

Publisher: Harper Business

A Division of Harper Collins Publishers

*2 道元禅師『正法眼蔵』「山水経」では、「しかあれば、山を参究すべし、山を山窮すれば山に功夫なり。かくのごとくの山水、おのずから賢をなし、聖をなすなり」と続く。

*3 RSNA : Radiological Society of North America (北米医学放射線学会)

*4 Interventional Radiology : 放射線診断技術を応用した新しい治療法。主に経皮的アプローチにより行われ、手術に比べて低侵襲で大きな治療効果が得られる。血管内にカテーテルを挿入し、血管そのものに操作を加える方法と、血管以外の部位に操作を加える方法とに大別される。

感染と人間（8）

中田 光

留学の夢

留学と結婚とは全く次元の違う事だけれども、どこか似ているような気がする。どちらも、望んでかなえられるというものでもないし、降ってわいたように決まってしまうこともある。また、幸も不幸も相手（留学先）次第だ。私の場合、留学はなかなか実現しない夢だった。

ウィリアム・ロム（写真1中央）先生に出会ったのは、89年の春にシンシナティ・シティーで開かれたアメリカ胸部学会の会場だった。ロム先生は、そのころNIH（国立保健研究所）のクリスタル博士のもとで肺胞マクロファージが産生する線維芽細胞の増殖を促進するタンパクの研究をしていて、同じ肺胞マクロファージに関する私の発表を聴いていた。「今度ニューヨーク大学の教授になるのだけれども、留学を希望しているならば来てみませんか？」と言われて、はじめは半信半疑だった。半年程たって忘れたところに手紙が来て、これからラボを立ち上げるので来春ぐらいに来るのがよいだろう、ついては、君の研究したいテーマを書いて送りなさいとあった。留学が本当に実現しそうになって、矢も楯もたまらなくなり、当時勤めていた結核研究所の上司の先生方に何度も嘆願に行った。最初、「君のように基礎研究志向の強い人が留学するのはよいことだ」とおっしゃっていた先生だが、どういわけか話が進むにつれ歯切れが悪くなり、最後は「どうしても留学したいなら、やめて行きなさい」と言われてしまった。

結核研究所時代の私は研究手法がワンパターンになっているのを自覚しつつも、研究費が乏しく、新しい方向へ展開して行けないでいた。次第に閉塞感が強くなっていくのを、留学を契

機に打開したいと思った。恩師で医科研感染症内科の島田馨教授に相談したところ、それならば医科研に戻って留学のチャンスをうかがいなさいということで、空いていた助手のポストに就けてくださったのである。こうしてロム先生に出会ってから3年目の92年夏、ようやくニューヨーク大学ペルビュー病院へ留学することができた。

エイズ研究センターの孤独

ロム先生は私に肺胞マクロファージに感染しているHIVを調べるという研究テーマを与えてくれたが、ウイルスを安全に扱うことができるP3と呼ばれる設備がなかったので、一番街を隔ててペルビュー病院の向かいにあるアーロンダイヤモンドエイズ研究センターのデービッド・ホー先生（写真1左）に共同研究を申し入れ、私をあずかってくれるように頼んだ。エイズ研究センターは広いフロアーに4つの研究室と6つのP3を持つニューヨークでもっとも充実した設備のエイズ研究施設だった（写真2、3、4）。ホー先生は90年にロスアンゼルスから移ってきて40人ぐらいのスタッフをかかえ、ようやくラボを立ち上げたところだった。ホー先生は台湾出身だったため、スタッフの半分は中国人で、特に私が配属になった研究室は中国人ばかりだった。

エイズ研究センターに席を得て3日目のことだった。これからの実験の計画と試薬の調整をノートにつづっていると、後から「ヘイ」と声をかけられた。振りかえると、中国人のお姉さんが怖い顔をして立ち、チュンチュンという耳慣れないイントネーションの英語で機関銃のようにまくしたてた。よくわからないと言うと、ちょ



中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。東芝中央病院内科勤務、米国ニューヨーク大学ペルビュー病院留学などを経て、現在、東京大学医学研究所微生物株保存施設助手。（左がホー先生）

っと来いという。私の電気泳動装置の電源コードを抜いて自分の装置に付けかえたのは、おまえだろうと言っていたのである。たちまち数人の中国人が集まってきた。私を見る厳しい目……。「まだ何にも実験していないんだ」と言っても信じてもらえない。腹が立つというよりも、何が起っているのかわかりにくく当惑した。やがて、真犯人がラボに現われて嫌疑は晴れたが、彼女は謝らなかった。後でわかったことだが、電源装置が足りなかったのも、みんな朝来ると自分の電源コードをつないで確保していたのである。シークエンス用のガラス板も、PCR装置もすさまじい競争の中にあった。はじめてのカルチャーショックに私は面食らった。何よりも困ったのは、ホー先生の英語はとてもわかりやすいのに、同じラボの中国人の英語がわからなくてコミュニケーションが取れなかったことである。多くの中国人研究者にとって、研究は生活のためであり、研究所は生存競争の場でもある。見聞を広めて新しい技術や知識を身につけようなどとあまっちょろいことを考えていた私とは、ハングリーさにおいて迫力が違っていた。私にはこのすさまじい生存競争を勝ち抜いていく自信がなかった。

黙々と実験している私の頭上を北京語やら広東語やらが飛びかい、話相手はおろか、実験でわからないことがあっても、相談する相手がなかった。たえず監視されているような気がして朝から誰とも一言も口をきかずに帰宅することも珍しくなかった。そればかりか朝、別のラボのアメリカ人にお早ようと言っても相手は目を伏せて返事が返ってこない。ああそうか、自分はここではSomebodyではなくNobodyなんだと思うと、孤独感が込み上げてきて居たたまれなかった。日本の友人や先生がたはいつたいていどうしているだろう。渡辺君は？ 桜田先生は？ 頭の中を「異国の丘」の哀愁をおびたメロディーがエンドレステープのように鳴っていた。

幻の4万ドル

2ヵ月が過ぎて私のメランコリーは次第に怒り変わっていった。3年間も待ってようやく果せた留学がこんな現実でよいのか？ ニューヨークに留学したつもりが実は北京だったなんて受け入れがたい現実だ。お世話になっているロム



写真1：左からホー先生・ロム先生・ワイデン先生



写真2：ホー先生のラボがあるニューヨーク市保健衛生研究所



写真3：ホー先生のラボ



写真4：アーロンダイヤモンドエイズ研究センターの内部。左側はP3 (HIVウイルスを扱う) 実験室が整然と並び、右側は一般実験室とスタッフルームである。

先生やホー先生には悪いけど、こんな憂鬱な気分ではよい研究などできるわけがない。動くなら早い方がいいと考えて、私はメリーランドにあるウォーターリッド陸軍病院研究所のモンテメルツァー博士(写真5)を訪ねた。メルツァー博士は知る人ぞ知るマクロファージ生物学の世界的権威で、雑誌 *Journal of Leucocyte Biology* の編集長をしたこともある。40人ぐらいのスタッフは全員がマクロファージの研究に傾倒していて、特にマクロファージに感染するHIVの研究では先駆的な仕事をしていて、私はメルツァー博士に事情を説明して、研究員に加えてもらえないかと頼んだ。メルツァー博士は私のためにNational Research Council (日本の学術振興会のようなもの)の奨学金に応募してみると言って、長い申請書を書いてくださった。これは、毎年4万ドルの生活費が5年間保証され、おまけに学会出張費まで支給されるという奨学金としては出色のものだった。日本からの応募ではまず通らないが、メルツァー博士のおかげで93年の春に承認された。私は、友人にたのんで陸軍病院研究所の近所によいアパートを探しはじめた。

ところが、この計画は93年の3月に暗転した。93年の1月にクリントン大統領が就任するやいなや財政再建のために陸軍の予算を10%削減した。そのため、陸軍は病院の予算を30%削減した。病院は仕方なく研究所の予算を50%削減したのである。こうして、たくさんのスタッフをかかえていたメルツァー博士のラボは一挙に立ち行かなくなり、解散せざるをえなくなったのである。彼がラボを去る2週間程前にウォーターリッド陸軍研究所を訪問した。さすがに疲労と落胆の色を隠せずにいたが、それでも彼は陸軍研究所の他のラボに電話をして私を受け入れてくれないかと頼んでくださった。私は研究者のはしくれとして研究を断念せざるをえなくなった時のつらさがよくわかった。メルツァー博士は自分よりもっと深い苦悩の中にいるのに、こうして私の世話をしてくださっていると思うと、このままニューヨークで頑張るのが私の運命のような気がしてきた。この決意を博士につたえ、お礼を言って研究所を後にした。それ以来、メルツァー博士とは会っていない。博士は現在パルチモアの病院で皮膚科医として働いておられるそうである。

肺のHIVを研究する

それでも研究を始めて1年程過ぎたころ、どうにか結果をまとめられそうなメドがついてきた。幸運だったのは、ロム先生率いる呼吸器内科のスタッフが好意的で、肺に合併症のないHIV感染者の気管支肺胞洗浄液を回してくれたことである。アメリカはこうした臨床研究が非常にやりやすいところだ。インフォームドコンセントが徹底しているので、感染者に協力を呼びかけやすいのである。定量的PCRという非常に微量のウイルスを測る方法を使うと、かなり進行したエイズ患者でも肺胞マクロファージに感染しているHIVのウイルス数は意外にも非常に少なく、10万個の細胞に1個から10個ぐらいのウイルスが感染しているという結果を得た。しかも感染しているウイルスの遺伝子配列は非常に均一だった。HIVは増殖していると遺伝子の変異が非常に起きやすいウイルスである。遺伝子が均一であるということは、肺胞マクロファージの中ではウイルスは休眠状態で増殖していないことを示している(同じマクロファージでもリンパ節や脾臓のマクロファージではHIVは盛んに増殖している)。私は、この結果をまとめて『分子医学』という英文誌に載せることができた。

次の研究テーマを模索していた時、ロム先生の下で助手をしていたワイデン先生(写真1右)から一緒に仕事しないかという誘いをうけた。彼はエイズに肺結核を合併した患者の気管支肺胞洗浄液中のHIVを定量し、その遺伝子配列を調べるという研究テーマを提案した。結核菌が肺に感染するとその刺激で休眠中のウイルスが増殖を始め、遺伝子の変異も増えていくだろうと考えたのである。私達はシャーレの中でHIV

に感染したマクロファージ細胞に結核菌を加えて刺激すると細胞からのHIVの産生が増加することを掴んでいた。シャーレの中で起こることは、きっと人体でも起きているに違いない。体の中のウイルス量が増えて変異が増すということは、臨床的にはエイズが進行するということを意味する。事実、HIV感染者が結核になると、たとえば結核をうまく治療できても、エイズが速く進行して寿命が短くなるという臨床統計が報告されていた(7頁図1)。「結核菌の感染が引き金となって休眠中のHIVが活発に増殖を開始する」という仮説を証明するために今度は肺洗浄液中の細胞内のHIVではなくて細胞外に浮遊しているウイルスを調べることにした。その方がウイルスの産生をよく反映していると考えたからだ。この頃までにエイズ研究センターでは血液中の非常に微量のウイルスを定量するシステムが確立されていたので、それを洗浄液に応用することができた。結核に感染した肺からのウイルスは予想どおり、感染していない肺からの液に比べて爆発的に増えていたのである(7頁図2)。しかも、ウイルスの変異は進んでおり、増殖効率のよいウイルスが出現していた。この結果もアメリカ胸部疾患学会誌に発表することができた。

エイズ研究センターの躍進

一方、ホー先生とスタッフたちは、2年間かけてラボの立ち上げに人と器材を集め、技術の集積をしていったことが実を結んで、次々と目を見張るような成果を挙げていた。ロム先生がプロジェクトチームを作らず、一人一人が違ったテーマを持って培養細胞株を使って研究していたのと対照的に、ホー博士は一つのテーマにつき4~5人のチームを作り、培養細胞を使う仕事を嫌ってあくまで臨床検体にこだわった。彼の研究手法はニューヨーク血液センターやペルビュー病院と協力してHIV感染者の臨床検体をかき集め、最新の技術を用いて丹念に仮説を検証していく手堅いやり方で、誰が見ても非の打ち所がないものだった。しかも、豊富な研究費とマンパワーを集中できるので一流誌に載るような仕事が半年ぐらいであつという間に完成していった。

この2年間でエイズの研究と臨床に画期的な進歩があったが、その多くにホー博士と彼のス



写真5：モンテメルツァー博士

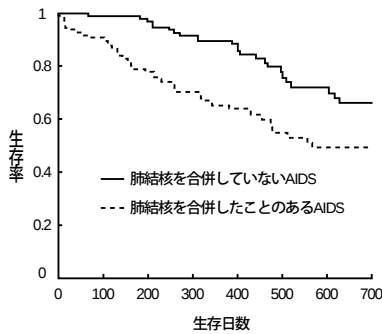


図1：エイズ患者の予後曲線と結核との相関

タッフが関与したので言及したい。HIVが明らかに体に入っても、感染、発症しない一群がいることは以前から知られていたが、その理由が彼らによって解明されたことである。HIVが細胞に侵入するには、ウイルスの膜タンパク (gp120) が細胞表面にあるCD4というタンパクともう一つセカンドリセプターと呼ばれるタンパクに結合することが必要だが、このセカンドリセプターの正体が長い間不明だった。96年にフォンらによって、それがCCR5とCXCR4というケモカイン (化学遊走因子) の受容体であることが明らかにされて以来、ベールを脱ぐようにHIVの細胞への侵入のメカニズムが明らかになった。ホー博士のグループはHIVに抵抗力のある人の白血球のセカンドリセプターを調べた。驚いたことに生れつきリセプターのタンパク質の一部分が欠損しているためにHIVが細胞に取りつくことができなかったのである。また、こうした先天異常を持った人は白人の10%にいてもわかった (残念ながら、黄色人種にはほとんどいない)。

もう一つは、HIV感染者に対するカクテル療法の開発で、プロテアーゼインヒビター、AZT、3CTの3剤を組み合わせることによって、進行していない患者でウイルスをほぼ完全に血液中から駆逐することができることがわかった。エ

イズという不治の病がたとえ治療できなくても寛解に導くことができることを初めて示したことになる。この功績でホー博士は雑誌『タイム』の「96年に最も活躍した人物」 (man of the year 96) に選ばれた。実は、ホー博士はすでに94年にベルビュー病院の臨床研究棟でボランティアのHIV感染者を集めてプロテアーゼインヒビターによる治療実験を行っていた。患者全員から投与後8週以内にこの薬剤に対する耐性を持ったウイルスが出現したが、最初の1〜2週間はこの薬剤が劇的に例外なく血液中のウイルス量を減少させることがわかった。この治療実験の結果は雑誌『ネイチャー』に掲載されてセンセーションを巻き起こしたが、その要点は次のようなものであった。

- ① 治療開始時の患者の血液中のウイルス量は人によってばらばらであったが、開始後のウイルスの減少速度はどの患者も一定であった。
- ② ウイルスが減少すると、減少していた血液中のCD4リンパ球の回復がみられた。患者の中には1マイクロリットル (1ミリリットルの1000分の1) 中に50個しかなかったCD4リンパ球が600まで増加した者もいた。プロテアーゼインヒビターはHIV感染細胞からのウイルスの産生を完全に止めることがわかっていたので、①の結果は体がウイルスを消滅させ

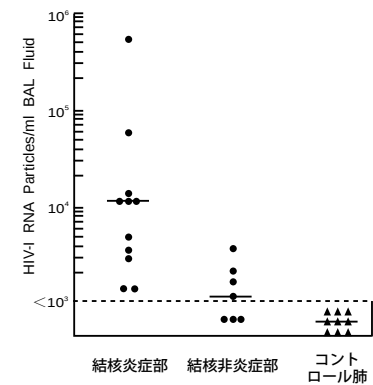


図2：気管支洗浄中のHIVウイルス量 (RNA copy数/ml)

ていく速度が一定であることを示していた。つまり、ウイルスの産生を止めれば血液中のウイルスは消滅に向う。②の結果は、ウイルスの産生を止めれば、免疫細胞の破壊も抑えられ、回復の可能性があることを示していた。

この発見によってホー博士はHIV感染者の免疫破壊が一部の研究者によって指摘されていた自己免疫的な機序ではなくて、ウイルスそのものによることを確信したという。このことが、後にカクテル療法を進めるきっかけとなった。

留学の光と影

帰国して2年が過ぎて一体あれは何だったんだろうかと思うことがある。島田馨先生は「留学は借金してでも行くべきだよ」とおっしゃっていたし、「留学がすべてだ」とアドバイスしてくださった先生もいた。しかし、あれほど憧れた留学もいざしてみると厳しい現実の連続だったし、マクロファージのHIV感染を研究しようと意気込んで帰国した私には、日本のエイズ研究の貧しさが立ちはだかっていた。医科研には、豊富なエイズ予算が来ていたが、そのほとんどはHIVそのものを研究していない研究者に回されるという不思議なしくみが出来上がっていて、私が割り込む余地などなかった。留学してよかったと言い切るにはまだまだ時間が必要な気が

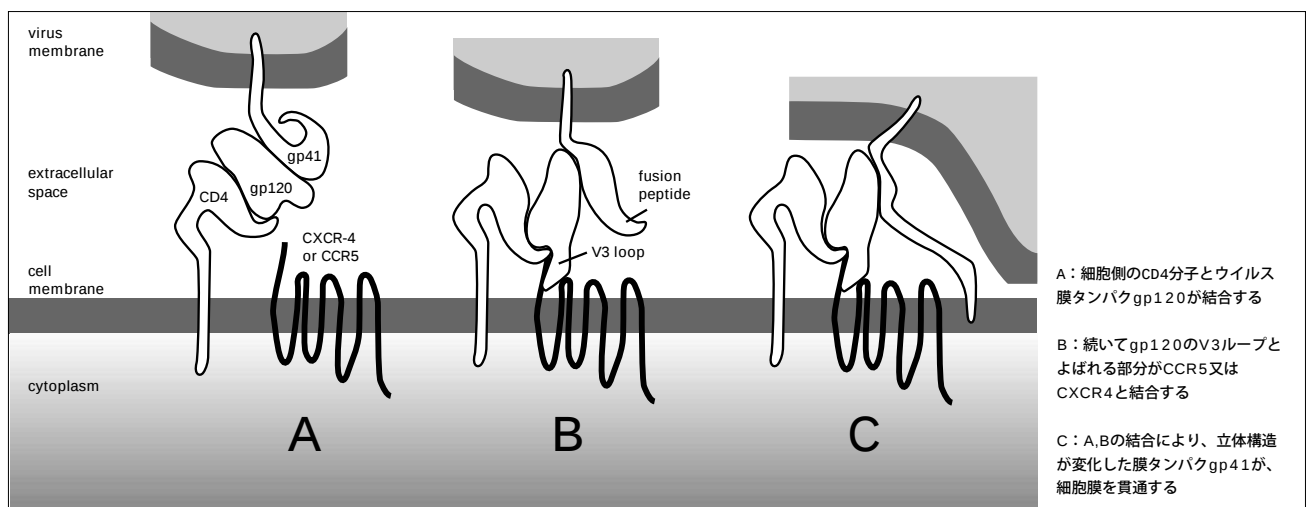


図3：HIVが細胞に感染するしくみ

する。

しかし、どう控えめに考えても、ロム先生とホー先生という二人の人格者のもとで仕事できたことは幸運だった。中国人パワーに押されっぱなしで、ラボの片隅で小さくなって実験していた私を励まし、テクニックの細部にわたって適切なアドバイスをくれたのは、他ならぬ台湾生まれのホー先生だった。彼は、今でも訪問すると童顔の顔をくしゃくしゃにして喜んでくれる。

また、ロム先生はニューヨークから逃亡を企てた私に給料を払い続け、研究が進めやすいようにあらゆる便宜をはかってくれた。いよいよ帰国という前日、挨拶に行くと、彼は自著の *Canoe Country Wilderness* という本をくださった（ロム先生はカヌーの愛好家として有名である）。その表紙の裏にはこんなことが書かれていた。

「中田光君へ。私達は君との仕事と君の研究努力を喜んでいて。帰国後の君の幸運を祈る」

人間関係で悩むことが多い私は、それでもなお「人間」に救いを求めているのである。



EAST OF PREWITT, NM 1996

フォト・ギャラリー・インターナショナル

KOZO MIYOSHI IN THE ROAD

三 好 耕 三

9.24 WED. - 11.14 FRI. 1997

PART I 9.24 Wed. - 10.17 Fri. PART II 10.20 Mon. - 11.14 Fri.

■ SALLY MANN 作品展 サリー・マン
11月19日(水) - 1998年1月30日(金)

東京都港区虎ノ門2-5-18 〒105 TEL 03 3501 9123



— P.G.I. 芝浦

今道子 写真集出版記念展
10月14日(火) - 31日(金)

清家富夫 作品展
11月5日(水) - 12月20日(土)

東京都港区芝浦4-12-32 〒108 TEL 03 3455 7827

音楽は心と体を癒す

——音楽療法の普及をめざす

岐阜県音楽療法研究所——

音楽を聴いてリラックスすることは誰でも経験しているが、近年これを体系化した音楽療法が高齢者や精神障害者の施設などで活用されはじめ、注目を集めている。

岐阜県が、全国初の公立音楽療法研究所の設立に踏み切るきっかけとなったのは、知事の梶原拓氏が、「知事を囲むガヤガヤ会議」の場で耳にした一つのエピソードだったという。それは、痴呆症の父親の介護に苦労していたある主婦の「父が若いころ好きだった『カチューシャ』の歌を繰り返し歌ううちに、次々と昔のことを思い出し、症状も軽くなった」という話であった。

梶原知事は高齢化社会到来を射程にいれ、県民の心身の健康維持のために音楽を活用する事業の準備に着手した。やがて1994年4月、岐阜県音楽療法研究所が誕生したのである。

開設時から研究所の運営に日々尽力されている所長の門間陽子^{もんま}さんにお話をうかがうことができた。

歌う、鳴らす、身体を動かす——能動的音楽療法

音楽教師時代、子どもたちの非行、不登校といった現実を見るにつけ、音楽をもっと別のかたちで生かせないかと模索していた門間さんは、桜林仁先生の音楽療法の本に出会い、これだ、と思ったそうである。20年ほど前のことだ。

その後、東京音大の応用音楽コースを終え、音楽療法の第一人者である村井靖児先生について東京武蔵野病院で分裂病の患者さんの音楽療法を担当する日々が続いた。3年後、日本医大の竹内孝仁教授に高齢者の音楽療法をやらなかと勧められた門間さんは、老人への療法にも取り組み地道に活動してきた。この実績が岐阜県に白羽の矢を立てさせる最大の理由となったのだが、門間さんは高齢者への音楽療法は、他の対象者と決定的に違う点があるという。

「言葉にすると暗くなってしまうのですが、高齢者の場合は、やはり『死』が大きなテーマになります。療法を行う際も、その方のよき時代の思い出を呼び覚まし、人生の終焉を迎える前に“生きてきてよかった”と、自分を肯定的に見ることができるよう援助していくことが課題になります。



門間 陽子 / もんま・ようこ
岐阜県音楽療法研究所長

小学唱歌や昔の歌をうたう『能動的音楽療法』はよく用いられます。歌はご老人の記憶を蘇らせたり現在を認識するのに役立ちます。口もきかず内に閉じこもっていた方が、次第にスタッフに心を開き、自分のよき時代のことを 發刺と話されるようになります。その日たった歌が糸口になって、お母さんの思い出をどんだん語っていたのに、途中から自分は妻を一度も真剣に愛したことがないという反省に変わり、ついには妻に詫言たい、と予想もつかない結末になったこともありました。でもそれでいいのです。心のわだかまりを吐き出せば、その方の気持ちが楽になり、整理もつきます。このとき、話をきちんと受けとめる人の存在が非常に重要なんです。

門間さんの言葉にあった「能動的音楽療法」とは、高齢者だけではなく自閉症、知的障害、精神障害をもつ子どもや大人へのセラピーの場に多く取り入れられている療法であり、歌う、鳴らす、身体を動かすといった能動的な行為が、対象者により刺激をもたらしていく、というものである。

「世の中でいわれる音楽療法では、レコードやCD、コンサートの鑑賞など受動的療法が取り上げられていることが多いのですが、私たちは能動的療法が重要ではないかと考えています。好きなリズムや楽器に触れると、患者さんの表情が明るくなるのがはっきりとわかります。大きな音を出すことで、鬱屈した感情が発散されて気持ちが癒されるのです。また硬直した筋肉や心がほぐれ、リラクゼーションをもたらします。同じ歌をうたい、演奏し、音が出せない人はリズムに合わせて動くだけでも、まわりの人との一体感が生まれます。言語のない人も、音楽をとおして意思の伝達や自己表現ができますから、人間関係はより向上し、痴呆や障害のある人は自分を認めてもらうきっかけになったり、自信や社会性も芽生えてくるのです。

もちろん、状況によって能動的な療法が難しい方は受動的療法に頼らざるを得ませんが、その場合もCDやテープの音より、どんなにヘタでも親しい人が歌う声のほうがよい場合が多いのです。ここにもまた、音楽療法士が患者さんと信頼関係をもちながら関わることの大きな意味があると考えています」



音楽療法の普及のために

事業スタートからさほど時を移さず、研究所は音楽療法の普及をめざす各種講演会や入門講座をはじめ、音楽療法士の資格取得を目的とした基礎研修・実践研修をつぎつぎに企画・開催した。その講師陣も門間さんはもとより日野原重明氏、松井紀和氏、村井靖児氏、栗林文雄氏など日本の音楽療法を担うそうそうたる先生方の協力を得ている。アメリカ・ユタ州との音楽療法の相互交流も軌道にのせた。一方、多少音楽の素養があつて県が定めたカリキュラムを履修できれば、一般の人でも「岐阜県音楽療法士」の認定が受けられるという独自の制度をも確立……。岐阜県がなし得た、この快挙の秘訣は何だろう。

「知事が理解を示し、行政が取り上げたことによって、音楽療法の分野そのものに対する信頼感が高まったんです。他県も音楽療法に深い関心を示してくださるようになりました。その意味で岐阜県の果たした役割はとても大きいと思っています」

最近特に目立った動きとして門間さんが嬉しく感じているのは、看護婦さんたちが病院の音環境を強く意識しだしたことだという。看護学校で音楽療法の講座が開催されるときは、研究所の研究員が講師として出向く。

「ICUの患者さんに、必要以上の症状が出てしまったとき、少しでも音楽で緩和できないか、長期入院の患者さんに何かしてあげたいがどうすればいいか……など、質問が電話で寄せられてきます。医師の場合は科学的データや直接的効果を重視するためか、音楽療法の導入に二の足を踏むこともありますが、看護婦さんは患者さんによいことならすぐにでも看護に取り入れたいと積極的なのです。

例えば、手術室を考えてください。実際に自分がおかれたら、それは恐ろしいような空間です。金属のこすれあう音、機械の音、人の声のトーン、全部が音環境に含まれます。いままで無神経すぎたのです。病院での音に対する配慮は必要だと思います。看護婦さんが患者さんに近い立場で考えるようになってきたのは、とてもいい傾向ですね。看護婦さんの声も音環境の一つだと意識すれば、患者さんに話しかけるときの声が優しい音楽にもなりうるわけですから」と門間さん。



音楽の癒しの力

音楽を県民の健康のために役立てたいという信念のもと、つぎつぎに新しい試みを形にしてきた岐阜県音楽療法研究所。最後にこれからの課題についてうかがった。

「今日まで、本当に多くの方々が音楽療法に興味をおもちになり、現場での実践を目標に研修や講座に参加され、日々研鑽されています。受講希望を登録している人は1200人、今年度すでに延べ5000人近くの方が参加されています。

今後は高齢者にとって高度な音楽が必要になってくると思いますし、本音を言えば少数に集中して研修を行ったほうが音楽療法士としての資質は上がるかもしれません。だからといって、一般の人への門戸を閉ざしたくはないと考えます。音楽は誰もが関わることのできる可能性を秘めた分野です。在宅医療の時代が来れば、一般の人が対象者と向かい合う機会も増えるでしょう。音楽を使って人と関われるような、大勢のセラピーマインドをもった人が巣立っていける研究所でありたいと思っています。

また、音楽療法はよい、といわれます。これは音楽そのもののもっている癒しの力によるところが大きく、体の免疫力、回復力が高まるなどのいい効果も出ています。しかしなぜそうなるのかについてはまだ医学的には解明できていません。治療の面からの取り組みには、十分手がつけられていません。そこで、研究所の課題として『音楽が人間に及ぼす生理的影響』の研究を取り上げ、他分野との共同研究もぜひ行っていきたいと望んでいます。

これからも私たちは県民のご要望やご意見に耳を傾けながら、音楽と人間との関わり……という大きなテーマに取り組んでいきたいと思っています」。

(取材・文：廣渡 淳)

連絡先：

岐阜県音楽療法研究所所長・門間陽子(もんま・ようこ)
岐阜県音楽療法研究所
岐阜県岐阜市藪田南5-14-53 県民ふれあい会館内
TEL 058-277-1155 FAX 058-295-5599

出会い (3)

——日本のいちばん長い日——

奥村 一郎



はじめに

ちょうど30年前、『日本のいちばん長い日』というタイトルの思い出の映画（*1）があった。「思い出」と「記憶」とは同じようで、かなりちがっている。外国語にもたいてい、このようなふたつの区別がある。フランス語のsouvenir（スブニール、思い出）は今では、観光客相手の「おみやげ店」の看板になっている。souvenirはふたつの言葉、sous（下に）と、venir（来る）との合成語だそうである。「記憶」の種が個人または国家、民族、さらに人類の歴史の大地に蒔かれて、やがてそこから芽が出て、花が咲くのが「思い出」である。記憶は時とともに流れ去るが、思い出は過ぎ去った出来事を今に生かす懐かしのメロディである。ドイツ語のGeschichte「出来事としての歴史」と、Historie「記録としての歴史」の区別とも似ている。

記憶は消えてゆく。しかし、思い出は時とともに深まることによって、その人、その国、その民族の歴史を養う糧となる。記憶は記録として残され、思い出は血となり肉となって、次の世代に命を伝える。記憶は文字になるが、思い出は活字にはならない。「不立文字。以心伝心」（*2）という禅語に通ずる「心のことば」が思い出である。ことばや記録がなければ記憶は風化する。しかし、心の歴史である思い出は神と人とのひそかな対話となって永遠につづく。

戦後すでに50年余、戦中世代が年ごとにすみやかに他界していく今、残されたもののささやかな戦争体験の思い出を残すようにとの友人・知人のすすめを素直に受ける気持ちになったのも年のせいかもしれない。老いのたわごとというようなことにしかならないであろうが、遠い思い出のつかぬ話のいくつかを記させていただく。

エノラ・ゲイ (Enola Gay)

一昨年、米国の首都ワシントンにあるスミソニアン航空宇宙博物館を訪ねた。1945年8月6日朝8時、広島に原子爆弾を投じたB29 エノラ・ゲイの真っ白な巨体の側に立ったときには、一瞬、竜巻のように遠い思い出が噴きあげてきた。

ちょうどその日、私は三重県の鈴鹿山脈の裾にあった第三航空

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、同大文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

隊の青年将校として勤務していた。巨大な新型爆弾によって、広島市全体が一瞬にして灰燼に帰したというニュースが入ったのは、その2時間ほどあとのことであつた。翌日、同僚に誘われて診察室に行ったところ、部屋のまん中に置かれた寝台の上に背を丸くして窓の方に向かい座ったまま、頭を垂れ、じっとしていた兵士のうしろ姿を目の前にした。幅広い背中全体が、赤、青、黒の色で塗った地図のようであつた。軍医と付き添いの仲間も、目を覆うようにして、一言もいえず、立っていた。元来血に弱いわたしは、側に近づいて慰める勇気もなかったことに、今なお胸が痛む。彼はまもなく悲しい地上を去って、神のみもとに行つたであろうと思ひ出すだけでも。

その頃から米軍機の空襲はいっそう激しさを増してきた。時に地上200メートルぐらいかと思うほど急降下して、兵舎をめがけて機銃掃射する。飛行士の真っ白な服装が鮮やかに見え、顔さえもわかつた。悔しいがどうしようもない。われわれも航空隊でありながら、完全に米軍の制空下におかれてしまっていた。兵舎の周辺にいくつも防空壕を掘って、そこに身を隠すことしかなかった。原爆投下後は毎日のように、日本に降伏を迫る下手な字で書かれたビラが空からばらまかれた。そのビラを拾いながら破り棄て、敗戦の色濃くなった毎日を、血気にはやる青年将校の仲間同志で励ましあっていた。「われわれが弱気になったら、軍隊も日本国民もどうなるか……？」と自らを叱咤する。毎日暗く、重苦しい空気に覆われていた。まもなく8月9日、広島につづく長崎への原爆投下。そして遂に日本は劇的な大戦の幕を閉じる羽目に追い込まれていった。

1945年8月15日（水曜）

わたしの記憶では、それほど暑くはない、明るく晴れた日だった。

天皇自身による重大ニュースの発表が正午にあるというので、全将校は正装でホールに集合するよう指示がでていた。

ホールの広がったせいもあっただろうが、当時のこと、ラジオの機能もよくない。なんとではなく弱々しい天皇の玉音は、うしろの方にいたわれわれにはほとんど聞きとれなかった。若者はいつどこでも、前進しか考えない。だからこそ若者であり、若者は社会のホープとなる。「今後ますます発憤して、鬼畜米英を一挙に粉碎壊滅せよ」という叱咤激励の詔勅であるにちがいないと思いこんでしまった。

神国日本にとって、敗戦全面降伏などということは、誰も考えようのない屈辱でしかなかったのが当時であった。まして、学も半ばに動員された若い学徒兵として祖国のために命を捧げたものは、耐えがたい挫折感に襲われた。たとえ、長く苦しかった戦争から解放された安堵感もあったというものの、全く予想もできない政治社会の混乱と、生活の貧困を思うと、台風の後に押し寄せる津波を待つような不安が日本全体に広がっていた。毎日のように飛びかう流言飛語におびえ、米軍の捕虜となる汚名を避けるため、隊長から部下のわれわれに、自決のための青酸カリが手渡された。

復員と復学

きわめて緊密であった軍隊の命令系統は、急に停電になったように寸断されてしまった。ひとつだけ奇異な公式通知がとびこんできた。「8月19日付、陸軍少尉に任命、従八位」というような証書が送られてきた。われわれ同期の見習士官への通知である。あだ名して「ポツダム少尉」といわれた。ポツダム会談（1945年7月17日～8月2日）で連合敵国が日本の終戦申し込みを受諾したからである。「従八位」というのは、いちばん下位なのだろうが、とにかく意味も価値もないとしても、敗戦記念というにはおかしくもあり、哀れな思い出である。

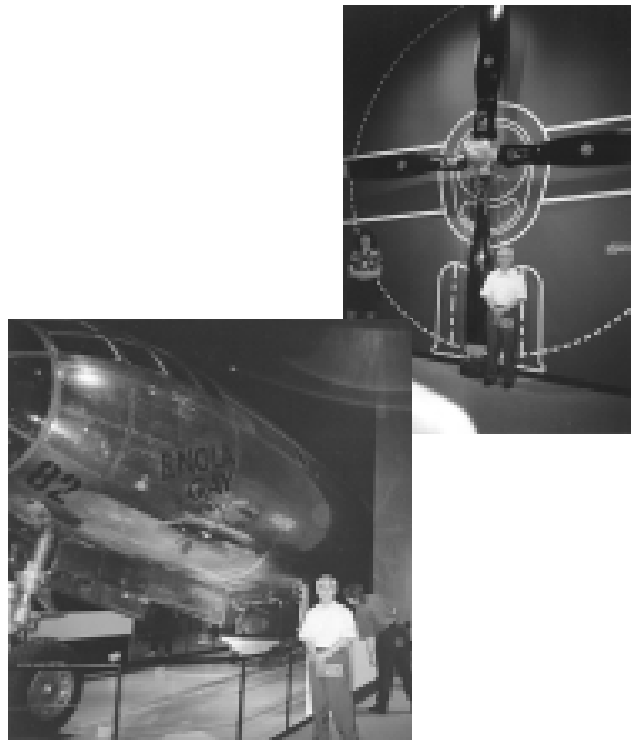
「復員」という終戦用語も、今の世代には不可解なことばになってしまったようである。「召集」とか「赤紙」、「動員」とか「退役」など、やがて辞書の中からも消えていくことであろう。敗戦のために日本の軍隊が米軍によって解散させられ、全兵員に帰宅命令が出たことを「復員」という。学徒兵の場合には同時に大学に復帰

したことから「復学」といわれた。わたしの場合、終戦1年前、1944年9月30日旧制一高卒、翌10月1日、東大法学部政治学科入学という形になっていた。「形」というのは、卒業試験も不可能な戦中の社会状況であったため、本人の希望と一高時代の内申書または調査書によって合否が決められたからである。

終戦2週間のあと、8月31日に復員。故郷でもある岐阜に住む両親のもとに帰ったが、終戦3週間前、7月23日（月）岐阜市は夜間大空襲によって全市街が廃墟と化していた。赤く錆びついたトタンを拾い、釘と針金で4本の丸太にしばりつけてつくったバラックが、わたしたち親子3人のやっとな雨風をしのぐささやかな住み^か処となった。

*1 岡本喜八監督、1967年東宝作品

*2 悟りは文字、言説をもって伝えるものではなく、心から心に伝わるものの意



スミソニアン航空宇宙博物館、エノラ・ゲイ展示前にて（1995年9月）

ブルゴーニュの美食とワイン

横山 弘和

ブルゴーニュ、常に微笑んでいるような美しい自然に囲まれた地方。ブルゴーニュ地方とは、はっきりとした独自の文化と伝統をもつ地方ですが、地図の上ではっきり線を引き、ここが境と定義づけることはできません。現在、地理的にはヨンヌ、コード・ドール、ソーヌ・エ・ロワール、ニエーヴルの4県を含んだ地方です。しかしブルゴーニュ風（ア・ラ・ブルギニヨヌ）料理を解釈するうえでは、広い意味でもう一つ南寄りのアン県を含める必要があると考えられます。この地方は、美味しい家禽類の飼育で有名なプレス地域と、美食家として知られたブリア・サヴァラン出生の町ベレヴィがあるブジュ地域を有する美しいところです。

ブルゴーニュ地方の恵まれた自然が産する豊かな食材には、肉類として、シャロレー牛、プレス鶏肉、モルヴァンハム、狩猟シーズンには野鳥獣肉（ジビエ）。魚類は川や運河で捕れる鯉、鰻、川鱸などの淡水魚とザリガニ。その他、野原や森林、田畑で採れるエスカルゴ、きのこ類、数多くの野菜、果物。クリーム、ラード、マスタード、お菓子に使われるスパイス類。そして家畜を飼育するのに重要な穀物。ないのは海岸線を持たない理由から海の幸だけ、他のものは何でも揃うのがブルゴーニュの豊かさです。

ブルゴーニュの食前酒キール

ところで、フランスでは通常、昼でも夜でも食事の前に軽く1杯、食欲増進の目的で飲み物を飲む習慣があります。ブルゴーニュの名物食前酒はキールです。これは第2次大戦後ディジョンの市長を務めた伝説的人物カノン・キール氏が考え出したアペリティフで、今やブルゴーニュを象徴する飲み物といえます。グラスに、これもディジョンの特産クレーム・ド・カシスを少量入れ、白ワインのアリゴテを満たして作るピンク色のお酒です。この飲み物は世界的にポピュラーになりました。そのバリエーションとして、白ワインの代わりにブルゴーニュ産発泡性ワイン、クレマン・ド・ブルゴーニュで満たすと、よりエレガントなキール・ロワイヤルになります。また、ボジョレーなどの軽い赤ワインで作るとキール・カルディナル（キール・コミューナルとも呼ばれる）になります。いずれの場合も、カシスの割合は少なめにしたほうが、甘すぎず美味しくいただ

けます。

そして一緒に奨められるおつまみがグジェールです。これは小麦粉とバター、卵、チーズで作るシュー状のパティスリーで、冷たい辛口の白ワイン、特にシャブリなどもよく合います。しかし美味しさのあまりつい2個3個と食べ過ぎると、後の食事に影響するので控えめに。

ブルゴーニュ風料理の旅

ブルゴーニュ風（ア・ラ・ブルギニヨヌ）料理の特徴はいわゆるおふくろの味、家庭料理にあります。ブルゴーニュを訪れ、この地方の優れたワインと共に発展したその偉大な食文化の伝統を、実際に現地で味わうのは究極の喜びです。幾世紀もかかって作り上げられた、完璧ともいえるグルメ道の素晴らしさには驚かされます。

昨年11月に佐多商會が企画しました「ブルゴーニュ栄光の3日間ツアー」では、まさにそのブルゴーニュ尽しの食事を満喫することができました。ツアーの1日をワインの町ボーヌでの酒蔵見学にあて、ランチはボーヌのレストランに予約を入れて、すべてをブルゴーニュ風料理で統一したコースとそれによく合うワインで、とあらかじめ頼んでおきました。当日宿泊先のシャトー・ドゥ・シャイイを出発し、午前中は町の中心にある、この地方でも最も古く有力なワイン業者



横山 弘和 / よこやま・ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ（東京）入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュバリエ・デュ・タートヴァン（利き酒騎士）叙任。現在佐多商會ヴィタリテ事業部在籍。

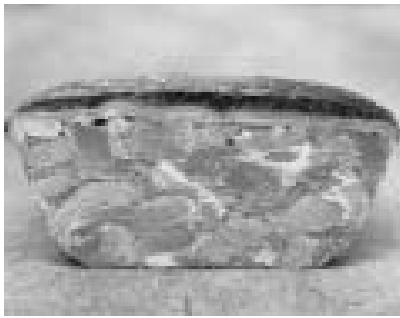
を訪問。ボーヌの町の地下深く掘られたカーヴを見学した後、同社自慢のワインを試飲し、丁寧な説明を受け気分が良くなったところでこのレストランに向かいました。我々のために用意されていたメニューは下の通り。

たっぷりのワインと、ワイン会社の輸出を担当しているフランス人との愉快的会話を楽しみながら、時間が経つのも忘れてこれらの料理に舌鼓を打ちました。これこそ、遠方より来たる友人を心からもてなすブルゴーニュ風オスピタリテの真髄だと感激、まさに記憶に残るすばらしい1日を体験しました。

前菜

この日先ず最初に出されたのがジャンボン・ペルシエ・ド・ブルゴーニュ（ハムのパセリ風味、ゼリー寄せ）。塊のハムを柔らかく煮込んでつぶし、それをたっぷりの刻みパセリと共にボールに入れて、ゼリーで固めた料理です。本来イースターのお祭りで供された料理で、普通ブルゴーニュ・アリゴテを飲むのが習慣です。しかしプイ・フュイッセやムルソーでもよく、赤なら軽いボジョレー・ヴィラージュが合うでしょう。

料理	ワイン
 ジャンボン・ペルシエ （ハムのパセリ風味、ゼリー寄せ）	ブルゴーニュ・シャルドネ・レゼルブ1995
12エスカルゴ・アン・コキユ （エスカルゴ・ブルゴーニュ風、殻付き）12個	サン・トバン1級1992
プッフ・ブルギニオン （牛肉赤ワイン煮、ブルゴーニュ風）	サヴィニー・レ・ボーヌ1級1991
フロマージュ・レジョノー （ブルゴーニュ産チーズ）	コルトン・ルナルド特級1983
スガー・グラセ （スガーのアイス）	マール・ド・コルトン30年物
カフェ （コーヒー）	



ジャンボン・ベシルエ・ド・ブルゴーニュ

次にブルゴーニュ風料理の極めつけ、エスカルゴ料理の話に移しましょう。エスカルゴは確かに他の地方でもいろいろな調理法で食されます。しかしエスカルゴといえばやはりブルゴーニュが本場です。それは、この地方がエスカルゴの生息地として古くから知られ、20年ほど前まではエスカルゴが好む雨の日、家族で長い棒を持って藪に入って地面を突つくと、野生のエスカルゴがバスケットに1杯や2杯簡単に捕れるほど多く生息していたことによります。しかしその後は、殺虫剤の多用などによる環境汚染が原因でなかなか捕れなくなり、今では収穫期を年間で7月と8月の2カ月に限定するなどの処置が取られています。現在レストランでは、トルコ、ハンガリー、北アフリカなどから大量に輸入されるエスカルゴが使われています。ここで気になるのは、外国から来たエスカルゴをブルゴーニュのエスカルゴと称してメニューにのせることの是非です。しかしレストラン側の言い分は、たとえよそからきたエスカルゴでも、伝統的にガーリックバターなどで調理されれば、それは立派なエスカルゴ・ブルギニオンと呼んで問題はないというものでした。ブルゴーニュ人はおおらかで細かいことにこだわらない人々のようです。また最近ではエスカルゴ牧場が出現し、養殖されたエスカルゴが大量に供給されるようになりました。エスカルゴが食べられなくなる心配は今のところないようです。ボヌの町でも、全てのレストランが数々のエスカルゴ料理をメニューにのせてサービスしています。

さて、エスカルゴの調理法はたくさんあります。蒸し焼き、パイの包み焼き、オムレツ、グラタン、ラヴィオリにスープ、そしてハーブソース、クリームソース、白ワインソース、赤ワインソースなどのソース類。あるレストランでは、コースの6品を全てエスカルゴ料理で統一し、エスカルゴ好きを喜ばせています。しかし一番人気があるのはやはり、刻みパセリ、エシャロット、ニンニク、バターを練り合わせたソースを身といっしょに殻に入れて焼く、この日も出されたエスカルゴ・アン・コキユ・ブルギニオンでしょう。

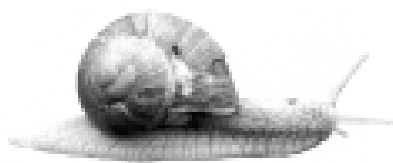
それではエスカルゴとワインの相性ははどうでしょう。基本的にエスカルゴ自体には味がありません。料理の味は、いっしょに調理される食材のフレーヴァーによって変わり、これがワイ

ンの選択に影響します。先ず辛口の白ワインがよいという意見が多く聞かれます。しかしソースの味が濃い場合、あまりデリケートな高級ワインは避けたほうがよいでしょう。全般的にブーズロンの若いアリゴテが無難で、クリームソースであれば丸みのあるベルナン・ヴェルジュレスが向くでしょう。しかし私の好みはオーセイ・デュレスやモンテリなどの中くらいの重みがある赤ワインで、どんなエスカルゴ料理とでも楽しめます。なお、エスカルゴ・オ・シャブリなど、料理に特定のワインが使われている場合は、迷わず同じワインを選ぶのが上手なやり方です。

今回は含まれていませんでしたが、この他にも代表的な前菜料理があります。卵料理のウフ・アン・ムーレット・ア・ラ・ブルギニオンヌ（卵の赤ワインソースかけ）。赤ワインを鍋に入れ、ブーケ・ガルニと玉ネギに調味料を加えて煮込み、卵をすべり込ませて火を止めます。スープ皿にパンを敷き、卵をのせて熱した赤ワインソースをかける料理です。クロ・ド・ヴージュの大晩餐会（ブルゴーニュ利き酒騎士団の会）では、ヴィニユロン風（葡萄栽培者風）として必ずメインコースの前にサーヴィスされます。この料理にはやはり赤ワインが絶対的に合い、南のシャロネーズ産メルキュレやコート・ド・ボヌの若い赤ワインがよいでしょう。

次回はいよいよメインディッシュに入りたいと思います。ボナベティ。

私が皆様をブルゴーニュへご案内します。
“栄光の3日間”と“ボジョレー・ヌーヴォー”
ブルゴーニュ / パリ9日間の旅
旅行期間：1997年11月14日～22日
ご興味をお持ちの方は、右記ヴィタリテ
事業部までお問い合わせ下さい。



Château de Chailly / シャトー・ドウ・シャイイ

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいている
ブルゴーニュへいらつしやいませんか。
数々の銘酒を生み出すぶどう畑、
グルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、
美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、
それがブルゴーニュです。



お問い合わせ
(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087